

インターライ方式 看取りケアのための アセスメントとケアプラン

Trevor Frise Smith, ほか = 著
定価: 3,740円(本体3,400円+税10%)
医学書院 ☎03-3817-5600



多職種による共通視点の看取りケアを可能に

千葉大学大学院健康増進看護学教授 池崎澄江

日々のOOLを最優先すべき人々への
最適なツール

「インターライ方式」とは、包括的アセスメント方式の国際的な基準であり、実は日本での歴史も長い。当初はMDS

(Minimum Data Set)方式と呼ばれ、施設を対象とした『高齢者ケアプラン策定指針』は1994年に、居宅版の『在宅ケアアセスメントマニュアル』は1996年に、それぞれ刊行された。そして、施設版と居宅版を統合した『インターライ方式

ケアアセスメント』が2011年に発売され、高齢者ケアに関わる専門職に長く役立てられてきた。監訳者は一貫してインターライ日本理事長の池上直己氏である。

日本における死亡者の年齢構成は85歳以上が半分を占め、高齢者施設での死亡数は右肩上がりの今、本書の発刊はまさに時宜を得たものである。

本書がOlanthe Careを「看取りケアのための」と翻訳したのは、要介護高齢者や難病患者への最適なツールであることを周知する上で、適訳であったと思う。要介護高齢者の最終段階は、その始まりが曖昧で経過も緩やかな場合が多く、日々のOOLを重視したケアこそがよい看取りケアにつながっていくものである。死期の迫った人という限定ではなく、支える医療・ケアという観点で対象者も幅広く、かつ継続して用いられることを期待したい。

看取りケアを推進するための 施設内研修にも

冊子はこれまでのシリーズ同様、大きくて見やすい。また、翻訳版にありがちな違和感がなく、日本に適した事例を追加して完成させた力作である。

第2章の記入要綱には、事例とともに評価方法の説明があり、どの職種にとっても分かりやすく工夫されている。本人の意向・価値

観を重視するACPのための情報収集には、「セクションA10…本人のケアの目標」「セクションN…心理社会的幸福」「セクションN…意思決定権と事前指示」などが該当する。具体的な質問の仕方も書かれており、実践的で参考になる。

こうした知識やスキルを関係者全員が持つことで、本人が伝えたい時にいつでも意向を伝えられる関係の構築につながると思われる。看取りケアを推進するための施設内研修での活用にもお薦めしたい。

現在、介護現場では科学的介護情報システム(通称LIFE)が稼働しており、ADLや各種加算情報の集約とフィードバックが行われている。多職種による共通視点でのアセスメントの重要性は、さらに高まってゆくだろう。インターライ方式のように、国際的で学術的、かつICFに準拠した実践的な包括的評価方法を一度身につければ、さまざまな場面で応用可能である。実践者はもちろん、研究者にも有用な書籍である。